

〈原著論文〉

## イギリス英語とアメリカ英語の差異

加曾利 実

### 抄 録

---

本論文は、筆者が2003年、半年間、イギリスのロンドン大学（University College London: UCL）に留学した折、イギリスの言語と文化について気が付いた事を元として、イギリス英語とアメリカ英語の言語的比較を学術的に論じたものである。まず、イギリス英語とアメリカ英語の[r]音声の特徴とイントネーションについて論じた後、イギリス英語の[t]に氣息音が生ずる音声現象について、スペクトログラムを用いて実証した。次に、日本の英語教育では、あまり触れられて来なかったと思われる英米の語彙やスペルの違いについて論じ、更に、文法や文化の面について、英米比較を行い、次に、日本に大きな影響を及ぼした、3つの異文化「中国文化、イギリス文化、アメリカ文化」に論を進め、最後に、纏めとして、日本の近代化が、主としてロンドン大学を通じて、イギリス文化・文明を吸収して成された歴史的事実について論述した。

---

キーワード：イギリス英語、アメリカ英語、氣息音、語彙対照、長州五傑

### 第1章 教科としてのイギリス英語とアメリカ英語

イギリス英語とアメリカ英語の差異について述べる前に、教科ないし学習科目としての英語について触れておきたい。日本人が英語を学習する場合、世界のどの国の英語を学ぶべきかというテーマは、明治維新から現代に至るまで英語学習上の重要な課題とされて来た。現在、英語教育に限らず、教育全般が文科省主導の下行われている。以前、その文科省が「グローバル・イングリッシュ（またはグローバル英語）」（Crystal 1997）を「英語学習の基本」とした時期があった。周知の如く、平成・令和以前の、明治・大正・昭和初期の時代までは、「イギリス英語」が中心であった。明治維新のとき、当時の明治政府は、イギリス英語を選択した。それは、後述するが、「長州五傑」の存在が、その謎を解き明かしてくれる。それが、第二次世界大戦後、「アメリカ英語」に変わり、その後、世界の共通語とも言うべき「グローバル・イングリッシュ」の登場となったわけである。

しかし、この「グローバル・イングリッシュ」は、あまり長く続かなかった。それは、実際のところ、「グローバル・イングリッシュ」などという英語は実在せず、要するに、英語の変種（へんしゅ）言語群または方言群のことだったからである。現在では、以前の状態に戻って、「アメリカ英語」または「イギリス英語」を基本にすることに戻ったようである。以上を纏めると、過去において、日本の英語教育は、①「イギリス英語」、②「アメリカ英語」、③「グローバル英語」、そして④「イギリス英語」もしくは「アメリカ英語」の順に英語教育が行われてきたと見るのが可能であろう。

一般的に言って、我々日本人が学ぶべき英語は、グローバル英語ではなく、イギリス英語かアメリカ英語の二つの内、どちらか一方か、または、両方の標準語（発音と表現）を学んでおけば、十分であると思われる。その理由は、「アメリカ英語」が使われている地域は、主としてアメリカ合衆国とカナダの二カ国だけで、残りの殆どが、イギリスの植民地時代から培われた、謂わばイギリス英語の地域方言とも呼べる「イギリス英語変種言語群」だからである。例えば、オーストラリアも、インドも、シンガポールも、歴史上、大英帝国の植民地であった関係で、英語が使われているのである。

それでは、日本人にとってイギリス英語を学んだ方が有利かという点、そうとも限らない。シェークスピアなどの優れた英国作家を通して、英国文化の学習が、その目的となるのならばいざ知らず、現代社会情勢を鑑みると、その世界的経済力の巨大さから言えば、何と言っても、アメリカ英語学習の方が有利である。特に、現代日本社会にとって、アメリカという存在は、非常に大きい。昔からの「アメリカがクシャミをしたら、日本は風邪をひく」という経済的・社会情勢は変わっていない。

また、「発音や文法の学習」という点から見ると、筆者の経験から言うと、まずアメリカ英語を学んだ後で、イギリス英語を学んだ方が、効率良く学習でき、場合によっては、両言語とも使い分けることが出来るようになる確率が高いように思われる。その逆の、イギリス英語からアメリカ英語の順番で学習する場合、両言語を使い分けるようになるのは、なかなか難しいようである。しかし、このテーマは、今回のテーマから外れてしまうので、またの機会に論じたいと思う。

イギリス英語やアメリカ英語の学習という場合、一つ重要な問題がある。それは、英語の文字、特に「書体（ブロック体と筆記体）の学習」のことである。実は、アメリカでは、ブロック体は当然のこと、筆記体も書けるのが一般的で、「サイン（署名）文化」から筆記体を書ける人が多くいる。例えば、有名なアメリカ独立宣言も、その原文は筆記体で記されている。その原文の下に署名が並んでいる。「サイン（署名）」は、日本的に言えば、「実印」の役割を果たしている訳である。それに対して、イギリスでは、ブロック体しか知らない人も多くいることを、筆者は、その経験から知っている。

## 第2章 発音の違い

英米の発音、特にイギリス英語の発音については、既に聖学院大学論叢 18 (3) の「比較音声学から見たイギリス英語の音声的特徴」(加曾利 2006) において詳述したので、ここでは扱わない。ここでは、イギリス英語の発音特徴とアメリカ英語の発音特徴における顕著な差異について、次の3点のみ述べておくこととする。

1つ目の点は、[r] の発音についてである。これは、一般的に、現代の英語音声学では、アメリカ英語の GA の [r] の発音とイギリス英語の RP の [r] の発音は、異なる別の発音とされている。イギリス英語の [r] を厳密に定義すると、Voiced Dental or Alveolar Approximant [ɹ] ということになる。これを fricative と定義する音声学者もいる(御園 1995)。しかし、これは fricative よりも Approximant という定義の方が、より適切であろう。筆者の観察では、イギリス英語の [r] もアメリカ英語の [r] も、聞こえとしては、非常に近似しており、英米共に、ほぼ同一に近い音声群と思われる。尚、アメリカ英語の音声の中には、上記の Voiced Post-alveolar or Retroflex Approximant [ɻ] の他に、Voiced Dorsal Approximant (有声舌背接近音) がある。むしろ、こちらの音声の方が、アメリカ英語 (GA) では普通に良く聞かれる音声なのである。以上、結論としては、次の定義が妥当なものと考察できる。

アメリカ英語の GA の [r] の発音：

[ɻ] Voiced Post-alveolar or Retroflex Approximant 「有声後歯茎ないし反転接近音」

イギリス英語の RP の [r] の発音：

[ɹ] Voiced Dental or Alveolar Approximant 「有声歯もしくは歯茎接近音」

2つ目の点は、イントネーションの差異である。イギリス英語とアメリカ英語との、大きな違いは、イントネーションの違いにあると言える。イギリス英語のイントネーションは、アメリカ英語のイントネーションと比較して、上がり下がりが、まるで「中国語の四声」の特性に近いものがある。その専門書があるほどである (Wells 2006)。その点、アメリカ英語のイントネーションは、イギリス英語ほど複雑ではない。このイントネーションの簡易性も、イギリス英語よりも先に、アメリカ英語を学習した方が、両言語を身に付けられる可能性が高いと筆者が主張する理由の1つである。

3つ目の点は、[t] の音声的差異である。アメリカ英語とイギリス英語では、[t] の発音は、その生起する環境に応じて、微妙に異なる。筆者の知る限り、この点について触れている書籍は、たった1冊しかない (小川 2009)。イギリス英語とアメリカ英語の [t] の違いを具体的に述べると、

以下の様になる。

アメリカ英語の [t] は、特に、母音の間などに来ると、有声化して、日本語のラ行に近い発音に変わる。例えば、「ウォーター」は、「ワラ」の発音に近くなる。これは、良く知られている。音声学的に表記すると、アメリカ英語の [t] は、その生じる環境によって、次の様な異音になる（御園 1995）。

表 1

1. 語 頭	[t <sup>h</sup> ]	(例：top, train)
2. 語 中	[t]	(例：star, stop)
3. 語 尾	[tʰ]または[t]	(例：cat, print)
4. 'th'の前	[t̪]	(例：eighth, at the door)
5. 母音間	[t̬]または[r]	(例：better, writer)

この「ワラ」の発音に近くなるのは、上記 5. の場合であるが、例単語として“water”を挙げる。アメリカ英語の“water”の [t] のスペクトログラムは、次の様になる。“water”の場合、アメリカ英語の [t] には、イギリス英語に見られる「氣息音」を観察できない。

American “water” [wɑt̬ər] or [wɑt̪ər] 5000Hz

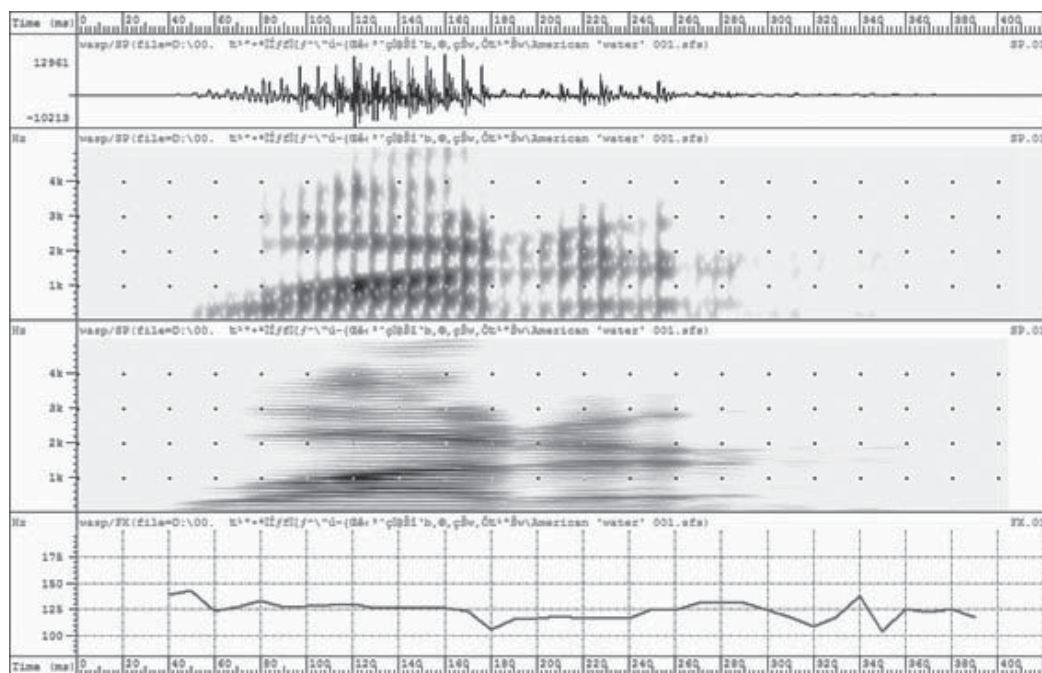


図 1 鹿島 央 2002『日本語教育をめざす人のための基礎から学ぶ音声学』スリーエーネットワーク，185 CD Track 56 1. water [r] を音声分析

これに対して、イギリス英語の [t] の実態は、日本では殆ど知られていない。事実、筆者も、2003年、ロンドン大学（UCL: University College London）に留学して初めて知ったのである。これをカタカナで表記すると、「ウォタハー」の様な発音になる。即ち、氣息音が生じ、有気音（または帯気音）になるのである。イギリス英語の“water”の [t] をスペクトログラムで表示すると、下の様になる。

British “water” [wɔtʰə] 5000Hz

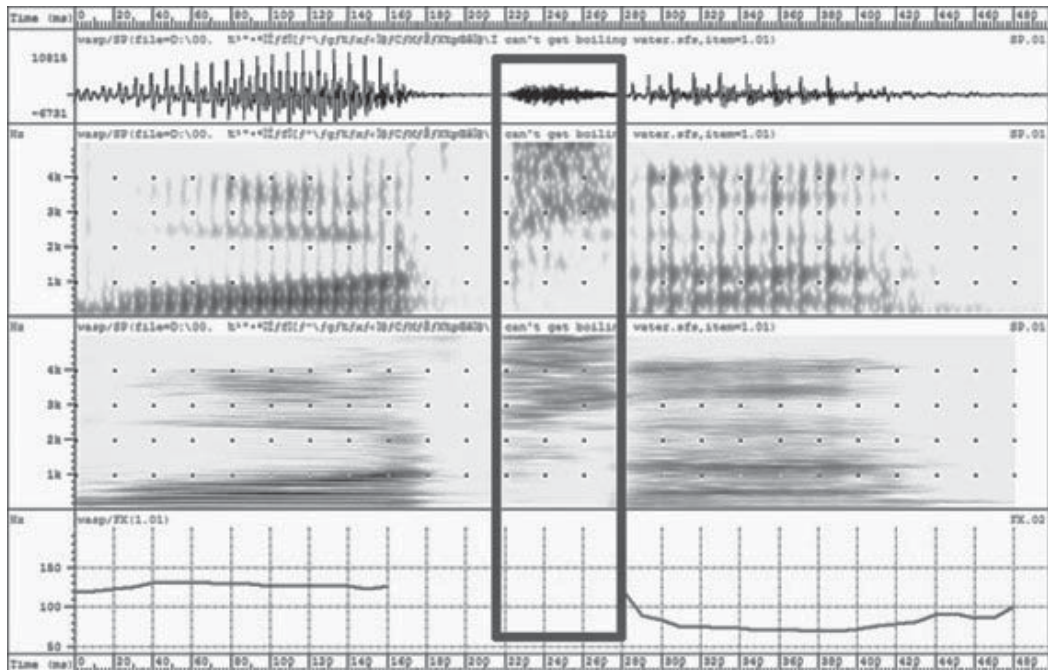


図2 小林美加 2020『英語 イギリスを旅する』三修社, 92 CD Track 42 1.“There is no water coming out.”の例文より“water”を音声分析

上記の British “water” [wɔtʰə] 5000Hz のスペクトログラムには、四角く括った個所に、氣息音が明確に現れている。概して、イギリス英語の場合、破裂音は、一部の例外を除いて、いかなる（生起）環境においても、氣息音を伴い、有気音（帯気音）となる傾向が見られるのである。従って、イギリス英語の [t] は、その生じる環境によって、次の様な異音になるものと推測できる。

表2

1. 語頭	[tʰ]	(例: top, train)
2. 語中	[tʰ]または[t]	(例: star, stop)
3. 語尾	[tʰ]または[t]	(例: cat, print)
4. 'th'の前	[t]	(例: eighth, at the door)
5. 母音間	[tʰ]	(例: better, writer)

この様に、3.と4.の環境を除いて、他の環境では、殆ど [tʰ] になることが分かる (小川 2009)。

因みに、筆者は、1988年のアメリカ留学中、ある体験をした。それは、知人と、アメリカのレストランに入ったとき、水が欲しくて、ウエイトレスに向かって“Water, please.” [wɔtʰə pli:z] 「ウォーター、プリーズ」と、ややイギリス英語風に3回ほど言ったのであるが、完全に無視されてしまった。ところが、“Water, please.” [wɑrər pli:z] 「ワラ、プリーズ」と、アメリカ標準発音 (GA) で、たった1度言った途端、そのウエイトレスは、飛ぶようにして、水の入ったコップを、私の眼前に持ってきたのである。この光景は、未だに鮮明に記憶に残っている。まさに「発音の重要性」を痛感した一瞬であった。

また、筆者は、2003年のイギリス留学中、UCLの冬期休暇に、南はブライトンから北はエジンバラまで各地を旅行したが、どこの人も優しく、親切であった。筆者が「RP英語」を話せたせいかも知れない。このように、「正確な標準発音 (RP) は、友好を促し、安全を保証してくれること」を知ったのである。

### 第3章 語彙の違い

イギリス英語とアメリカ英語の主たる語彙は、基本的に殆ど同じと考えて良いのであるが、中には、全く異なる単語を使用する場合がある。重要と思われるイギリス英単語をアルファベット順に列挙し、その後、その意味に相当するアメリカ英単語を付す。更に、○印の後に、日本語の意味・説明を出しておく。

(英) bank holiday (米) public holiday

○ 祝日。「イングランド銀行の休業」に因み、イギリスでは祝日を“bank holiday”と呼ぶ。

(英) bill (米) check

○ 伝票。レストランなどで、会計を頼みたいときには、“May I have the bill, please?” (英) と言う。イギリスで“check”または、“cheque”は、小切手のこと。

(英) chemist/pharmacy (米) drugstore

- 薬局。イギリスでは“drug”というと麻薬のイメージになる。薬は“medicine”と言う。

(英) city centre (米) downtown

- 繁華街。イギリスでは“center”を“centre”と綴る。

(英) concessions (米) reduction, bargain

- 割引。「学割はありますか」を“Do you take student concessions?”と言う。

(英) crisps (米) chips, French fries

- ポテトチップス。イギリスで chips というと、フライドポテトのこと。(例：“fish and chips”)

(英) fizzy drink (米) soda (pop/soft drink)

- 炭酸

(英) flat (米) apartments

- アパート

(英) ground floor (米) first floor

- 1階。イギリスでは、1階が“ground floor”，2階が“first floor”，3階が“second floor”となる。  
アメリカは、日本と同じ。

(英) holidays (米) vacation

- 休暇

(英) lift (米) elevator

- エレベーター。エスカレーターは、イギリスでもアメリカでも“escalator”である。

(英) off-licence (米) liquor store, package store

- 酒類小売店

(英) petrol (米) gas/gasoline/petroleum

- ガソリン。ガソリンスタンドは，“petrol station” (英)，“gas station” (米) となる。

(英) Photocopier (米) Xerox (コピー機のブランド名)

○ コピー機。アメリカでは、有名なブランド名を使う傾向がある。

(英) rubbish (米) garbage, trash

○ ゴミ

(英) toilet/lavatory (米) restroom

○ 公衆トイレ。イギリス口語では、“loo”という言葉も使われる。イギリスの公衆トイレは、基本的に、すべて有料である。

(英) trousers (米) pants

○ ズボン。イギリスでは、“pants”は、下着のパンツを意味する。

(英) underground (米) subway

○ 地下鉄。イギリスでは、地下鉄は“tube”とも呼ばれる。

(英) Vacuum cleaner (米) Hoover (掃除機のブランド名)

○ 掃除機。ただし、イギリスでも、Hooverと言うこともある。

(英) wall socket (米) outlet

○ コンセント。日本語の「コンセント」は、和製英語。

#### 第4章 スペルの違い

イギリス英語とアメリカ英語とでは、スペルの綴りが多少異なる語彙がある。下に、主だったものを、イギリス英語をアルファベット順に挙げ、次にアメリカ英語を出しておく。

- ・飛行機：(英) aeroplane, (米) airplane
- ・アルミニウム：(英) aluminium, (米) aluminum
- ・行動：(英) behaviour, (米) behavior
- ・中心：(英) centre, (米) center
- ・色：(英) colour, (米) color
- ・関係：(英) connexion, (米) connection



- ・記憶する：(英) memorise, (米) memorize
- ・くちひげ：(英) moustache, (米) mustache
- ・組織する：(英) organise, (米) organize
- ・疑い深い：(英) sceptical, (米) skeptical
- ・巧みな：(英) skilful, (米) skillful
- ・旅人：(英) traveller, (米) traveler

イギリス英語とアメリカ英語において、スペルの違いが生まれた背景には、アメリカの学問の父と呼ばれるノア・ウェブスターが辞書編集を行った際、イギリス英語のスペルは、「実際の発音」と異なると考え、イギリス英語のスペルに違和感を覚えた。そして、アメリカ英語の実際の発音に合わせたスペルに変更して、アメリカ版の辞書を作り上げた。これが、現代のアメリカ英語の基礎となったのである (<http://english-hacker.jp/1138>)。

日常生活においては、英米のスペルの違いは、殆ど問題ないが、英米の大学などに留学した場合には、特に注意を払うことが望まれる。その理由は、課題レポートを英米のスペルの違いに無頓着に提出すると、場合によっては、ミススペルとして扱われ、減点対象となる恐れがあるからである。留学する国が、アメリカ式かイギリス式か、どちらの英語のスペル形式をとっているか確認しておくべきである。例えば、オーストラリアは、イギリスの植民地であった歴史的背景から、イギリス式スペルを使用している。

## 第5章 文法の違い

イギリス英語は、アメリカ英語に比べて、「現在完了形 (have + 過去分詞)」を使う頻度が高いのが文法上の特徴の一つである。文法の詳細な内容は、ここでは述べず、1例だけ挙げておきたい。アメリカでは「過去形」で言い表すようなことも、イギリスでは「現在完了形」を使う傾向がある。その他にも文法上の違いがあるが、本論文では、割愛させて頂く。

- ・(英) I've lost my mobile phone. (携帯電話を失くしてしまった)
- ・(米) I lost my cell phone.
  
- ・(英) Have you had dinner yet? (夕食はもうとりましたか?)
- ・(米) Did you have dinner yet?

英文法に関係したことで、気になることが、2003年のロンドン滞在中にあった。それは、たま

にはあるが、一部のイギリス人が、意外にも「アメリカ英語の表現」を使うことがあったのである。それが記憶に残り、ずっと不思議に思っていたのだが、ある時、その謎が氷塊した。滞在先のロンドンハウスの部屋で、TVを付けてみたら、たまたまドラマをやっていたのだが、そのドラマが、アメリカで制作されたものであったのである。これで得心がいった。先ほどの「アメリカ英語の表現」を使うイギリス人は、どうやら、この様なアメリカで制作されたドラマを見て、アメリカ英語が自然と身につけてしまったようだのだ。そもそも、イギリス人とアメリカ人が、会話していて、意思の疎通ができないなどという場面に遭遇したことがないが、この様な事実が、その背景にあるのかも知れない。

## 第6章 文化の違い

この章では、イギリスとアメリカの文化的差異について述べる。単に英米を比較するよりも、日本との対照とにおいて比較した方が、より鮮明になる様に思われるので、英米日の比較文化について少しく触れる。イギリスとアメリカには、明らかに大きな差異がある。イギリス人は、どちらかと言えば、「日本人に近い特質」を持っているように推測できる。むしろ、実際には、その逆で、明治維新の頃に、日本文化が、主としてロンドンを中心とするイギリス文化を取り入れて近代化を果たしたと考えれば、似てくるのも当然の帰結であろう。それに加えて、同じ島国という風土も密接に関係しているかも知れない。しかし、日本とイギリスというテーマを扱った書籍は、幾らでもあるので、これ以上は、扱わないこととする。

それに対して、アメリカ人は、日本人と真逆と言える。一概に言えないかも知れないが、筆者の個人的な印象では、世界で最も性格が明るい人々は、アメリカ人の様に思う。また、アメリカ人にとって、特に上流階級の人たちほど、「イギリスを母国と捉えている」ことが多い。実際、筆者の経験では、学科長の自宅でパーティがあり、その家に着いて、ドアを開けた時に、目前に「巨大な額縁に収められた家系図」があったことが忘れられない。その「家系図」は、恐らく、「私たちは、イギリスからアメリカ合衆国に渡来してきた、由緒正しき人々なのだ」ということを意味していたのであろう。因みに、文房具屋には、名前を入れれば、「家系図」ができるセットも売っているほどである。この点、革新的と言われるアメリカの保守性を垣間見た気がした。

日本人がアメリカ人の特質について学びたいと思った場合、これを端的に表現したテキストと言えば、何と云っても、“Polite Fictions” (Sakamoto, N. and Naotsuka, R. 1995) が一番優れていると思う。日米比較文化論として、第一級のエッセイ集と考えられる。因みに、筆者は、ゼミで「日米比較文化論」を扱うときには、必ずこのテキストを用いた。

## 第7章 イギリスとアメリカの、日本への影響

この最後の章は、イギリス英語とアメリカ英語の差異というテーマから、いささか逸れてしまうが、イギリスとアメリカの、日本への影響について少しく述べておきたい。特に、イギリスが日本の近代化において果たした役割には、甚大なものがある。

日本は、歴史上、海外の異文化を多く取り入れてきた。その異文化を消化して、日本文化の独自性を築いてきた。概論的に言うと、その中心となる国は、①中国（古代から明治維新前まで）、②イギリス（明治維新から第二次世界大戦まで）、③アメリカ（第二次世界大戦後）の3ヶ国である。

古代日本の時代から明治維新前まで、その筆頭となる国は、やはり「中国」である。日本は、中国文化から多大な影響を受けている。その中国文化は、ほとんど「韓国」を通じて渡来したと聞いている。中国から直接来た中国文化は、2-3割程度の様である。

その後、近代に入ってから、主としてヨーロッパから大きな影響を受けたのである。明治維新のとき、君主権の強いドイツ（プロイセン）から、伊藤博文が「大日本帝国憲法」を起草し、また、フランスからは、「軍制」を取り入れた。しかし、個人的な見解ではあるが、その他の大半（筆者の推測では、8割程度）が、イギリスからの影響なのである。実は、東京の都市計画は、ロンドンを基礎にしているのである。鉄道、地下鉄、郵便制度、デパート（ハロッズを真似た。三越デパートの前にあるライオンの像は、ロンドンのトラファルガー広場にある3匹のライオンの1つを真似て作ったとのこと）、都市計画など、日本の近代化は、イギリスのロンドンを基にして作られたものと言っても過言ではない。

また、第二次世界大戦後、アメリカのGHQ指導の下、日本人が世界に誇れる「日本国憲法」を始め、民主主義国家としての礎（いしづえ）が築かれた。「男女同権」、「婚姻の自由」などの基本的人権（日本国憲法を真に理解するには、英語力が必要である）を得、ディズニーなどの影響で、日本人の日常生活は革新した。トヨタ、ソニー、パナソニック、富士通などの現代の科学技術の躍進も、アメリカのサポートがあって初めて可能となった。このお陰と、当時の文部省による強力な指導により、日本人の「改良能力」「改善能力」が開花した。これは、この時期になされたのである。

さて、本題のイギリスに話を戻そう。上記の様に、日本の近代化は、イギリスのロンドンを基にして作られたものなのであるが、その契機となったのは、やはり「長州五傑」と呼ばれる人々のことを抜きにしては語れない。「長州五傑」の言葉を借りれば、「生きた器械となって、日本の近代化に尽力」し、多大な貢献を果たしたのである。筆者は、ロンドン大学に留学するまで、彼らの存在を全く知らなかった。今でも殆どの日本人が知らないのではないのではないかと思う。Wikipediaには、次のように説明している。

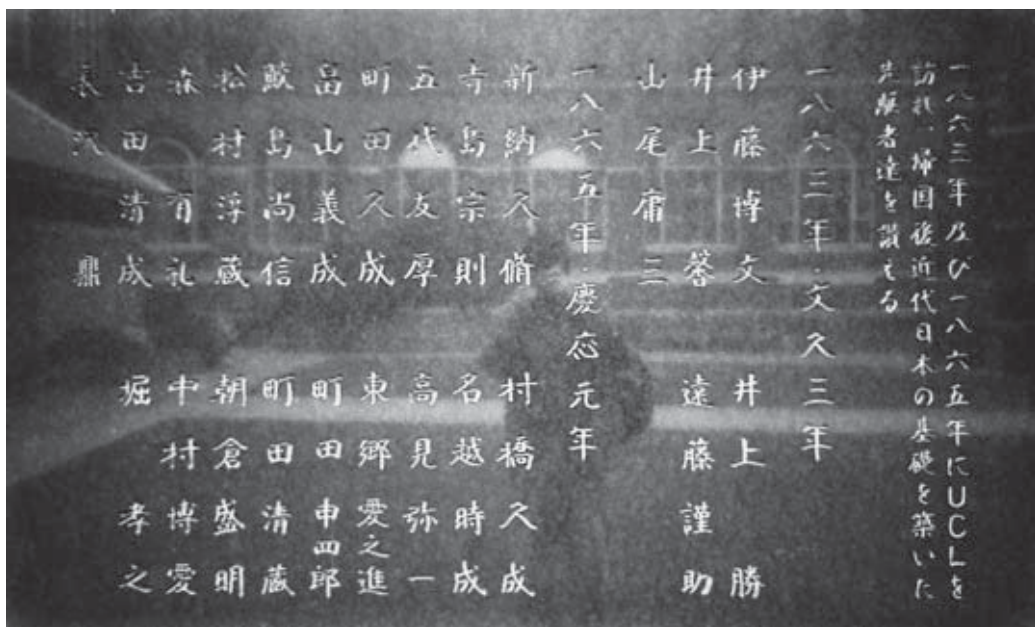
長州五傑（ちょうしゅうごけつ）とは、江戸時代末期（幕末）の1863年に、長州藩から清国経由でヨーロッパに派遣され、主にロンドン大学ユニヴァーシティ・カレッジなどに留学した、井上聞多（馨）、遠藤謹助、山尾庸三、伊藤俊輔（博文）、野村弥吉（井上勝）の5名の長州藩士のことを指す。

正に幕末から明治維新における、日本の近代化は、この5名の長州藩士が、イギリスのロンドン大学（UCL：University College London）へ密留学したことから始まるのである。彼ら抜きにしては、日本の近代化について語ることはできない。彼らは、実に様々な偉業を成し遂げているが、その主たる業績を次の様に列挙できる（DVD『長州ファイブ』及び小冊子）。



遠藤謹助（上段左）、野村弥吉（井上勝）（上段中央）、伊藤俊輔（博文）（上段右）、井上聞多（馨）（下段左）、山尾庸三（下段右）

出典：フリー百科事典『ウィキペディア（Wikipedia）』



2003年12月5日 UCLの中庭にて 筆者撮影

遠藤謹助	「造幣の父」
野村弥吉（井上勝）	「鉄道之父」
伊藤俊輔（博文）	「初代内閣総理大臣」
井上聞多（馨）	「日本開国を主張し、真の外交を目指した初代外務大臣」
山尾庸三	「工業之父、聾啞教育」

映画「長州ファイブ」は、主として山尾庸三にスポットライトを当てて、そのエピソードが語られている。それは、彼が、5人の内、最も長期（5年間）に渡ってイギリスに滞在したためであろう。何度も言う様に、日本の近代化は、イギリスのロンドン大学に留学した「長州ファイブ（長州五傑）」と、その後が続いてイギリスなどのヨーロッパに留学した人々によって成されたと言ってしまうのではない。前の頁に、ロンドン大学に展示されている彼らの写真と記念碑の写真（筆者撮影）を挙げておく。

ともあれ、本論文において、イギリス英語とアメリカ英語の差異の一端を明示化できたら、筆者にとって望外の喜びである。

#### 参考文献

- 小川 直樹 2009 『イギリス英語でしゃべりたい! UK 発音パーフェクトガイド』 研究社, 48-49  
鹿島 央 2002 『日本語教育をめざす人々のための基礎から学ぶ音声学』 スリーエーネットワーク, 185 CD Track56 1. water [r]  
加曾利 実 2006 『聖学院大学論叢 第18巻 第3号 聖学院大学チャペル完成記念論文集』 「比較音声学から見たイギリス英語の音声的特徴」 聖学院大学, 31-50  
小林 美加 2002 『英語 イギリスを旅する』 三修社, 92  
ジャパンタイムズ [編] 2005 『LIVE from LONDON』  
御園 和夫 1995 『英語音声学研究 理論と応用』 和広出版, 49, 228

Crystal, D. 1997 *English As A Global Language*, Cambridge University Press  
Sakamoto, N. and Naotsuka, R. 1995 *Polite Fictions*, Kinseido  
Wells, J.C. 2006 *English Intonation An introduction*, Cambridge University Press

#### 映画

DVD 『長州ファイブ』 2006 KEN Media (小冊子「史実! 長州ファイブ」)

#### コンピュータソフトウェア WASP

WASP is a program for the recording, display and analysis of speech. With WASP you can record and replay speech signals, save them and reload them from disk, edit annotations, display spectrograms and a fundamental frequency track, and print the results.

WASP is a simple application that is complete in itself but which is also designed to be compatible with the Speech Filing System (SFS) tools for speech research.

### Copyright

WASP is not public domain software, its intellectual property is owned by Mark Huckvale, University College London. However WASP may be used and copied without charge as long as the program and help file remain unmodified and continue to carry this copyright notice. Please contact the author for other licensing arrangements. WASP carries no warranty of any kind, you use it at your own risk. Wasp artwork from <http://www.webdog.com.au/> with thanks.

### URL

<https://english-hacker.jp/1138/2019-02-24> (語彙関係)

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%95%B7%E5%B7%9E%E4%BA%94%E5%82%91> / 長州五傑 2021-11-14

<https://www.phon.ucl.ac.uk/home/wells/fonts.htm> (IPA SAMFonts 音声記号フォント)

# On the Difference between British English and American English

Minoru KASORI

## Abstract

---

This paper is a comparative study of British English and American English based on my observations about British language and culture when I studied at the University College London (UCL) for six months in 2003. First, I discuss the phonetic characteristics of [r] and intonation in British English and American English, and then I demonstrate the phonetic phenomenon of the aspirated sound in [t] in British English using a spectrogram. Next, I discuss the differences in vocabulary and spelling between the United Kingdom and the United States, which have rarely been touched on in Japanese English education. Then, I compare aspects of American and British grammar and culture before discussing three different cultures that historically had a great influence on Japan: Chinese, British, and American cultures. Finally, as a summary, I discuss the historical role that UCL played in Japan's modernization by educating the Japanese about the British culture and civilization.

---

**Key words:** British English, American English, aspirated sound, vocabulary contrast, Chosyu Five